

2013年

6月10日

第255号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地

〒884-0102 Tel 0983-32-2025

支援なのか子育てなのか

園長 児嶋草次郎

例年より早く梅雨に入り、花壇の花々は次々に腐ってしまいましたが、代わりにアジサイが園内のあちこちで元気よく咲いてくれています。

冬場、まだ花壇を休ませている時期に咲いてくれるのが、サザンカや梅や桜ですが、この梅雨時期、がんばってくれるのがこのアジサイなのです。この時期に入ると暑くなって子ども達の生活も徐々にルーズとなり、雨が降り続くとうっとしくなりマイナス思考に陥りがちで、「雨に打たれても明るく元気に花開くアジサイを見習おう」と、子ども達にとって模範にできる花です。友愛園にとっては重要な意味を持つ花なのです。この大自然の中で共生していると、自然から励まされる部分もけっこうあるのです。

友愛園の子ども達のためだけではなく、訪れる人々をも癒すことができる園庭にしたいと思い、アジサイも毎年増やしてきましたが、最近、赤系のアジサイがその存在を徐々に主張し始めています。

そんなアジサイ達と語り合えるようになった5月末、私は延岡市内の九州保健福祉大学に出かけて行き、「社会福祉援助技術現場実習の事前指導に伴う講話」とやらをさせていただきました。大学の先生からの要請によるものです。2、3年後か、3、4年後か、確実に友愛園の子ども達の何人かがこの大学に進学させていただくことになるだろう、今のうちから、できるだけ先生方と関係を作っておきたい、そんな思いが私の胸の中にはあります。

5月は決算役員会の準備や、新年度の具体的な事業計画作り等でけっこう忙しく、当日4時に起きてレジメを作り、片道2時間弱の運転時間の中で、肉付けをアレコレ考えました。大学の先生と同じようなことを話しても意味はなく、私達現場人間は、経験の中で得た知恵を伝えればよいのであろうと考えました。

午前中、20名弱の施設実習を希望されている学生さんが真剣に聞いて下さいました。私は最初は次のような話をしました。

「児童養護施設については、その立場によって、とらえ方は随分違うのであろ

うと思います。私は、生まれたのも児童養護施設の中であるし、子ども時代の友人も児童養護施設の子も達だったし、一時期大学進学等で外に出たことはありますが、卒業した後は指導員として働き、園長になり現在に至っています。

児童養護施設の子も達と言うと、大学等では『虐待を受けたり、ネグレクト状態の中で生きて来たりで、かわいそうな子ども達』というようなとらえ方をされるのではないかと思います。『かわいそうな子ども達』という同情で施設実習に来ようとしているのであれば、来ない方がよいと思います。

2週間ほど前、友愛園であった5月の誕生会で、5月生まれの私も子ども達と一緒に祝ってもらったのですが、その時私は『これからは、この友愛園の子も達の中から、私を乗り越える人間が現れることを楽しみにして生きていく』と抱負を述べました。

今、日本社会は大きな変革期だと言われます。そういう変革期には、世の中を変える人物が現れます。世の中を変えられる人というのは、人々の最底辺の生活を知っている人です。明治維新の時でもそうでした。物質的に豊かな生活をして、自由気ままに生きている人は、こういう時はダメです。そういう世の中を変えられる人というのは、今どこにいるのか。今朝（5月23日）の朝日新聞に、茨城県高萩市長草間吉夫さんのことが載っていました。この人は、児童養護施設で育ち、東北福祉大学を出て、松下政経塾でさらに学んで、市長になられています。この人もそうかもしれないけど、私は、児童養護施設で育つ子ども達の中から世の中を変える人物が出て来るのではないかと期待しているのです。

現在友愛園には、下は2才から上は18才まで47名の子ども達が生活していますが、高校生が19名おまして、その中には学校の先生になりたいとか、福祉施設で働きたいとか、結構志の高い子が出て来ているのです。おそらく2、3年後、この九州保健福祉大学に入学する子がいます。今日は、この20名ほどの学生さんの中に、児童養護施設を卒園した学生さんがいると想定して話をさせていただきます。

施設の子も達は、かわいそうな子ども達ではない。皆さんの席の隣りに座るライバルになるかもしれない子ども達なのです。」

私のこの挑戦的な話を学生さん達はどう聞いたのでしょうか。このような話は大学の先生方にはできないでしょうから、びっくりしたはずです。私は別にハッター屋になったわけではありません。現在友愛園で生活している中・高生達を見ても、能力・資質ともに優れた子が結構多いのです。時々訪れる実習生より能力的に優秀だと思わされることも時々ありますし、私や職員達よりあきらかに高い資質を持っている子もいます。私は十分に世の中を変える人材に育つ可能性は秘

めていると感じているのです。

そういう子ども達にとって課題は、人間に対する信頼感と自律力（自己コントロール）でしょう。親から半強制的に離されて施設生活をしているわけですから何らかの人間不信がある。本人はあまり意識してない場合もありますが、色んなトラブルの際、愚痴や不満となって爆発します。「プラス思考！プラス思考！」と呼びかけてはいますが、そんなに簡単に人間不信を克服することはできないのです。こういう宿命に生まれて来たということは、神から与えられた永遠の課題とも言えます。

永遠の課題とは言っても、ここ（友愛園）にいる間に少しでも乗り越えておかないと、社会人になってもずっと引きずっていくことになってしまう。強い人間不信があれば、当然就職しても人間関係で衝突をおこし、仕事も長続きしなくなります。そして悪循環に陥っていきます。特に人の上に立とうとする者は、しっかり自分自身のその陰の部分に向き合いプラスに転換すべく努力を重ねていかねばならないのでしょう。友愛園にいる間に気付きから始めなければならないのですが、これがなかなか難しい。

次の自律力（自己コントロール）については、何も施設で生活している子ども達だけではなく、我々人間共通の課題でもあります。人間は皆動物的欲望を抱えて生きているわけであり、子どもから大人になることは、そのコントロール力を身につけることができたということでもあらねばならないわけです。普通は、家庭生活の中で愛情に裏付けされたしつけを重ねるごとに、自然に身につけていくものなのでしょう。これも普段の生活の中では互いにあまり意識していませんが、何らかの誘惑の前に立たされた時に、本性を発揮するということになります。

自律力の低下は、しつけの崩壊した一般家庭の子ども達に与えられた課題でもあるのですが、この問題が人間不信とつながると、なかなか手強くなります。色んなトラブルの原因が親や職員や施設に責任転化され、問題をますます深刻化させていくのです。自分自身の課題としてとらえられなくなってしまうのです。これではいつまでたっても克服できず、ズルズルと社会人になっても引きずっていきます。

動物的な衝動性を持っていること自体は問題はないでしょう。芸術家や優れたスポーツ選手は、皆そのエネルギーを昇華した人達なのだろうし、ようは、そのエネルギーをコントロールする自律力を身につけることができたのかどうか問われているわけです。

思春期の子ども達の乗り越えるべき大きな課題でもあり、友愛園ではそのことを意識させるために、生活を「修行」として位置づけているのです。これも先ほ

どの「人間不信」と同じように指導としてはなかなか難しい課題であり、同じ人間である職員達も常に葛藤しながら取り組んでいると言ってよいでしょう。

最近の友愛園の具体的な問題をあげるならば、喫煙の問題、それに異性交友関係の問題があります。自分が自己コントロール力が弱いとは反省はできるのですが、次の態度・行動の変化、習慣化（自己コントロール力の強化）となるとなかなか実践できないのです。

能力・資質は素晴らしいものを持っているのに、人間不信や自己コントロール力の弱さが足を引っ張っている、そう言ってもよい子ども達が何人もいます。この課題をここの修行で克服できれば、第二の西郷隆盛、坂本龍馬、そして石井十次を生み出すだろうに、私は日々そう願ひ、祈っているのです。

話が横道にそれてしまったような気がします。九州保健福祉大学での講話の話にもどします。私は前置きの後、レジメにそって話を進めました。1、児童養護施設が現在置かれている状況について、2、宮崎県における児童養護施設の現状について、3、石井記念友愛社、石井記念友愛園の取り組みについて、4、子ども達の生活と職員の指導について、そして最後が実習生としての心構えです。

まあ、現場人の話に片寄りすぎて違和感を感じる学生もいたかと思いますが、多分大学の先生がうまく調整して下さったことでしょう。何よりも、私のような井の中の蛙をお呼びくださったことに感謝しなければなりません。

私は、話の中で、子ども達の三つの課題と職員の三つの仕事をあげていますので。ここに書きとめておきます。まず子ども達の三つの課題です。

- ① 権利、義務、誇りをつなげること。
- ② 過去、現在、未来という人生の流れを自分なりに整理し直すこと。
- ③ 自分の運命を変えること。

職員の三つの仕事はこれです。

- ① 養護（ケアワーク）。
- ② 親子関係の再構築（ケースワーク）。
- ③ 自立支援（子育て）。

ここで一番難しい課題が③の自立支援（子育て）です。結局、児童養護施設の仕事は自立支援なのか子育てなのかという問いに行きつきます。自立支援と割切れば、高齢者福祉や障がい者福祉における支援の形と同じようにマニュアル化して職業として成り立っていくのでしようが、子育てということになると、親代りということになって、職業として割り切れない部分にまで立入っていくことになります。「子育て」は職業ではないのであり、その世界を職業としての枠をはめ労働基準法でしぼろうとするのですから矛盾しているわけです。先ほどの子ども

達の間不信や自己コントロール力の克服に職員が寄り添い力を貸そうとするならば、「支援」レベルで子ども達の心の中に入っていきけるわけがなく、やはり寝食を共にする付き合いの中で信頼関係のある程度築き得た時にのみ可能となるのであらうと思うのです。

職員それぞれに、どこに線を引こうとしているのか、この職業を選んだ時、厳しく自らに問いかけなければなりません。幸い石井記念友愛社は、住込勤務をとっており、子ども達にとってはより身近に職員がいるわけではあるから、より助けは得られやすく、子ども達はもっともっと未来に対して挑戦的に生きてもよいのではないか。そう私は願っています。

このアジサイの季節を無駄にすることなく、子ども達は日々努力を重ねてほしいと思います。もちろん私達職員も、子ども達に真剣に向き合えるように、一歩踏込んだ子育ての生活を送るべくがんばらねばなりません。